

## 審査論文要旨（日本文）

論文提出者氏名：佐竹 直哉

審査論文

題名：Prognostic value of preoperative pyuria in patients with non-muscle-invasive bladder cancer (筋層非浸潤性膀胱癌患者における術前膿尿の有無と膀胱内再発予測因子に関する検討)

著者：Naoya Satake, Yoshio Ohno, Jun Nakashima, Makoto Ohori, Masaaki Tachibana

掲載誌：International Journal of Urology, 2015 Jul;22(7):645-649

(審査論文要旨：日本語論文の場合 1,000 字以内・英語論文の場合 500 words)

目的：様々な悪性腫瘍において、腫瘍関連性の炎症反応が腫瘍の進展や再発と密接な関わりがあると報告されている。しかしながら、筋層非浸潤性膀胱癌において再発予測因子として術前膿尿を解析した報告例はほとんどない。本研究では筋層非浸潤性膀胱癌患者における術前膿尿の有無と膀胱内再発予測因子に関して検討した。

方法：我々は筋層非浸潤性膀胱癌と診断された 237 例の患者データを後ろ向きに解析した。尿沈渣法において、WBC 5/HPF 以上を膿尿有りと定義した。臨床病理学的因子と膀胱内再発の関連について、Cox 比例ハザードモデルを用いて解析した。

結果：237 例中 116 例 (49.0%) に術前膿尿を認めた。術前膿尿の有無は、年齢、尿細胞診、腫瘍数、腫瘍径、腫瘍形態、病理学的病期、細胞異型度と有意に相関していた。単変量解析において、膿尿の有無、細胞診、腫瘍数、病理学的病期、BCG 膀胱内注入療法の有無が膀胱内再発と有意な相関があった。多変量解析においては、細胞診、腫瘍数、BCG 膀胱内注入療法の有無と同様に膿尿の有無が、膀胱内再発に関して独立した予測因子であった(HR 3.332, 95% CI 2.052–5.410;  $P < 0.001$ )。次に BCG 膀胱内注入療法が施行された群における解析でも、膿尿の有無は膀胱内再発に関しての独立した予測因子であった。2 年非再発率において、膿尿を認めた患者群は膿尿を認めなかった患者群よりも有意に低かった(65.5% vs. 80.7%;  $P = 0.027$ )。

結論：筋層非浸潤性膀胱癌患者において、術前膿尿の有無は膀胱内再発に関して有意な相関があり、さらに BCG 膀胱内注入療法施行後の有用な再発予測因子となる可能性が示唆された。